

授業記録『日本はどのようにして開国したか』

～高校日本史B：阿部正弘と林復斎による外交交渉に学ぶ～

石川 誠司の学

1. はじめに

敬和学園高校では、日本史は日本史 B1(縄文・弥生時代～鎌倉・室町時代)と日本史 B2(戦国時代～第二次世界戦前後)に分かれていて、各3単位であり、2・3年次での選択である(B2は3年次で履修)。他に日本史Aがある。これも2・3年次での選択である。2000年以降、日本史B2を担当してきた。日本史Bを選択している生徒の中に、歴史が大嫌いという生徒はいない。しかし、「暗記するのが苦手」「年号や人名が覚えられない」と嘆く生徒は多い。生徒にとって、学校で習う歴史の授業において、「暗記」は決して切り離せないもののようである。

『子供たちは歴史を暗記ものだと思っている。この通念の形成に、教師が一と役買っているのではないが。教師は彼らのために大事なことを板書する。子供たちはせっせとそれをうつして試験にそなえる。歴史の授業の中で子供たちは、可哀相に、一生懸命ノートをとる以上のものに出会っていないのである。』⁽¹⁾ 林竹二のこの指摘は今も新しい。従来の筆者の授業も、この指摘がズバリとあてはまるものでしかない。

そんな中で、「歴史」は暗記モノではない。自分なりの解釈があっていい。自分で感じたことを表現していい。場合によっては、もし〇〇〇だったら、この時代に△△△なことがあったかもしれないし、今の□□□は全く違ったものになっていたかもしれないと、大いに想像を膨らませていい。そんな科目であることを体感してほしい」と願って、2000年以降授業に取り組んできた。

何か一つ、過去の政治状況や経済状況なりをきわめて具体的に描くことが出来て、その中に生徒を導き入れてたっぷりと情報を与え、考えるに値する問いを発すれば、生徒は必ず自分で考える。感性豊かに自分の生き方や社会の在り方を重なり合わせて思索を深めていこうとする。その時、きっと彼らの目は生き生きするはずである。歴史の出来事を自分とは無関係なこととしてではなくとらえることが出来れば「過去に生きた日本の人々に、今の自分が学ぶものがある」という気づきを引き起こし、「過去の人々への敬意の念を抱く」ことにもつながる。過去の日本で起きた出来事の中に、あるいは人物の生き方の中に、今の自分がこの日本に住みながら人生を充実して生きていくときのヒントやエネルギーが豊かに含まれていると感じてくれれば、実にありがたいことである。本論はその新たな試みの実践記録である。

2. 授業のねらい

戦国時代から明治にかけての授業の内容は大変盛りだくさんであるが、その中でも「開国」の場面は、生徒たちが自分なりにいろいろ考えることが出来る格好の教材であるといえる。⁽²⁾

多くの生徒にとって「開国」といえば黒船の来航であり、黒船といえばペリーである。「江戸時代、幕府は鎖国をして国を閉ざしてしまっていたので、世界に取り残されてしまっていた。」、「産業も軍事力も遅れていた日本は、黒船(ペリー)によって、無理やり、しかし、ようやく開国させられた」、つまり、「強引なアメリカによって、日本の悪習である鎖国が破られたのはかえって良かったんだ」というような開国のイメージを多くの生徒が持っている。そこにどんな外交交渉があったのかは想像の外であり、せいぜい、「交渉にあたった幕府の役人は、なすすべもなく、ペリーに押し切られた」である。その際、何語で交渉したかさえも思考の外である。⁽³⁾ 単に、黒船＝開国＝明治維新という言葉がつながっているだけの生徒もいる。

ただ、このような見方は、実は教科書の記述に沿うものである。現在、敬和学園高校で使用している桐原書店『新日本史B』の記述は以下のとおりである。1853(嘉永6)年、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーは、軍艦4隻を率いて浦賀に来航し、フィルモア大統領の国書を示して開国を求めた。幕府はペリーの強硬な態度に押されて国書を受け取り、翌年春に回答することを約束した。(中略)1854(安政元)年、ペリーは軍艦7隻を率いて再び来航し、強硬に開国を迫った。幕府はやむなくその要求を入れ、日米和親条約を結んで、①薪水・食料・石炭を供給するため、下田・箱館(函館)の2港を開く、②難破船・漂流民を救助する、③下田に領事の駐在を認める、④片務的最恵国待遇を与えるなどのことを約束した。(注：下線部引用者)

他社の教科書の記述もほぼ同様である。⁽⁴⁾

しかし、こうした一方的なアメリカの軍事的圧力になすすべもなく屈したという見方は、今日までの歴史研究の成果を十分に踏まえたものではないだろうか。⁽⁵⁾ 受け身的と見られがちな開国の交渉において、日本は主体的であった部分があった。ペリー来航は確かに外圧以外の何物でもないが、「開国」に際して、その後の日本の政治のありように大きな影響を与える大きな改革が行われている。それらの政策の中心を担ったのが老中首席阿部正弘である。この人物を中心にして、2時間の授業を組んでみた。黒船の来航は日本に危機をもたらした。しかし、当時、徳川家による幕藩体制も幕府の支配力が低下するという危機的状況にあった。外側からの危機(外圧)、内側からの危機(内圧)にさらされた幕府をどう保ち続けていくか、これが阿部正弘に課せられた課題であった。

その課題の解決にあたって、阿部は大きな決断力と実行力、見事な調整力を発揮する。一見して、優柔不断に見えないわけでもないが、その実、巧妙な策で、幕府・諸大名をまとめ上げていくその手法は、国全体の利益を見据えたものである。彼以後の政治家の中に、もし阿部の資質と行動力を受け継ぐ者がいれば、明治維新のあり方もずいぶん異なったものになったのではないかと筆者は思う。

外部世界の情報を得ていた阿部は「もはや開国は必至」と感じながらも、その「開国」という難題をどのような内部の体制で乗り切っていくのかの青写真を描くことのできる数少ない人物であった。彼が思案したのは、単なる幕府権力の存続ではなかった。さもなくば、「開国」の意味するものを彼は見誤り、国内の政争の中で憂き身をやつすだけの政治家でしかなかったのではないか。阿部は「日本」を意識し、それを創り上げるために行動した最初の政治家であろう。彼は攘夷派の激しい抵抗に遭いながらも内部対立を調整し、戦争（武力衝突）を回避しつつ日本の面目も保ち、死傷者を一人も出さずに開国させた。武力で威嚇され、脅かされて相手の言いなりになって開国したわけではない。ペリーは自分と交渉した日本の役人に、将来の手ごわい相手を読み取っている。

こうした阿部の政策に生徒たちが学ぶこと・感じることは多い。たとえ国際社会への関心を持っていなくても、国際社会における今の日本の政治や経済に対して誇りを持たずにいたとしても、日本という国で生を与えられていることへの感謝などは皆無に等しいとしても、もともと歴史には興味も関心もないとしても、そういう生徒たちの心の中に、「開国」の授業によって少しの「学ぶという事件」を起こし、彼らが自分で疑問を感じ、自分で何かを考え始めるきっかけが得られたらと願っている。

現行の学習指導要領によれば、「日本史B」の目標は「我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立って総合的に考察させ、我が国の文化と伝統の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国民としての自覚と国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う。」とある。

さらに、内容（1）歴史の考察においては、「歴史を考察する基本的な方法を理解させるとともに、主題を設定して追究する学習、地域社会にかかわる学習を通して、歴史への関心を高め、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」とある。また、内容の取扱いにおける配慮事項として「我が国の歴史と文化を、各時代の国際環境や地理的条件などと関連付け、世界の中の日本という視点から理解させること」や「歴史上の人物の果たした役割や生き方などとかかわらせてとらえること」と挙げられている。

このような学習指導要領に示された学習の内容やその在り方にきわめて合致した授業が「開国」の内容で展開できると筆者は考えている。

3. 授業計画(授業の中で考えたいこと)

第1時 「ペリーが持ってきた白旗の意味と老中阿部正弘の政策」

ペリーが幕府に送った白旗は「戦わずに降伏せよ」などの意志表示か? 全国に米大統領親書を公開したのはなぜか?

第2時 「阿部の政策の意味と林復斎の対応」

林復斎とペリーの交渉の意味することは何か? 攘夷派への対応策はどのようになされたか?

4. 板書の内容

(第1時) テーマ 「日本はどのようにして開国したの?」

1843年9月 老中阿部正弘(45年に老中首座となる)

44年頃 琉球: 米、仏、英の求めに応じず鎖国維持

52年 幕府、米艦隊(ペリー)来航の情報得る(オランダ風説書)

53年6月 ペリー、浦賀に来航。久里浜に上陸

国書提出 <白旗2本>を提供...自分の考えは?

(白旗の意味についての生徒の考え)

2本で日本。だから一緒に日の丸と、アメリカ国旗を描こう

自分の方が相手よりも下

タテマエとして(開国させる)ためをお願いする感じ

自分にはヤマジイことがないことをあらわす

最初から「おまえら、降伏せよ」という意図

単なる「砲艦外交」ではない

アメリカは正義(万国公法)の実現を求める。

鎖国(通商を断る)は天理に背く。すなわち罪である。

その罪をあらためさせるのが文明国アメリカの勤め。

(この我々の要求に従えないのであれば)

日本は国法により、戦うべし(防戦すべし)。戦えばわれわれが勝つ。

そのとき和睦を請いたければ白旗を立てよ。

そうすれば、砲撃を止める。

(幕府の対応) …待ってくれたいが、待つことが出来なかった。 (第1時) 阿部正弘は、幕府の対応に不満を感じ、この時、幕府が「なめられた。」「名誉を傷つけられた。」などと、カッとなっていたら、戦いがあったかも？

(阿部の胸の内) どう？

どうしたら鎖国を続けられるか、その方法は何か。鎖国を続けるか、開国するか。開国すればどのようにして開国するか。つまり日本が、アヘン戦争で英国に敗れ、欧米列強に不平等条約を押し付けられた。清国のようにならないためにはどうしたらいいか？

(宿題) 阿部がなぜこんな前代未聞のことをしたのか考えてくる

(第2時) 米大統領の国書を諸藩に公開した結果、幕府の中の争い：攘夷派(外国船は打ち払え!)派 v.s. 開国派

徳川家の危機 ⇔ 日本の危機…阿部の危機意識
「何が何でも戦争は回避したい。戦争になれば必ず、植民地にされてしまう。今の幕府や諸藩の防備では、とてもアメリカにかなわない。」
1854年1月、ペリー艦隊(7隻)再来航、横浜沖で交渉始まる。
幕府接待係「林(復齋) 大学頭」とペリーとのやり取り。(外交交渉の実際)

ペリー：もし、貴国においてこれまでの政策を見直さねば、つまり、開国せねば、多数の人命に関わることに「敵国」とみなす。(戦争も辞さず)
林復齋：我が国は人命を尊重し、善政をしている。にもかかわらず、非道の政治と…
「…というのは迷惑千万。貴国が人命尊重をいうのであれば、我が国も同様。双方とも、積年の恨みがあるわけではなし。
…強いて、武力に訴えるまでもないのでは？」
双方は戦争状態にあらず、従って和睦の必要もなし。

3月3日 「日米和親条約」調印 (神奈川条約)

→①薪水・食糧の供給 ②難破船の救助 ③下田・箱館の開港

→アメリカが強く要求していた自由貿易を認めず

1855年10月 老中首座「堀田正睦」(阿部は次席に…2年後病没)

1856年7月 アメリカ総領事ハリス下田に着任 “通商を要求”

5. 授業記録 (第2 / 2時)

（注釈の欄）

以下、初めて日本史を担当した2000年度の授業の様子をテープ起こししたものの抜粋を記す。

（注釈の欄）

（注釈の欄）

石川：今までの流れを簡単に振り返ります。日本はどのようにして開国してきたのかという問題です。1853年の6月に、ペリーが浦賀にやってきました。久里浜に上陸して、アメリカ大統領の国書を持ってきて、ついでに白旗をくれて、「絶対、開国しろ」と迫りました。そして、すぐには答えられないだろうから、返答する期限を1年与えてやる。そうやっていったん引き揚げました。結果的にペリーは、1年たたない内に再び日本にやってきました。

（授業の始まりではいつも前時の復習をしながら内容を確認する。）

石川：ペリーが再びやってくるということを、阿部正弘は当然覚悟していました。その時どうするか、その対応を彼は彼なりにいろいろ考えていました。その時の日本の、特に各大名達が一体どういような考え方で、黒船の来航をとらえていたかという、主に「攘夷」という考え方です。

石川：攘夷というのは、「外からやってきた悪いやつを追っ払え、追っ払うのは当然だ、外国船は打ち払え、徹底的に日本の国を守るべきだ。」という考え方。それに対して開国派がいて、「アメリカにはかなわない。仕方がないから開国するしかない。」大きく分けてこの二つ。幕府の中でこの二つの考え方に割れていました。そこで阿部正弘は、このアメリカ大統領の国書、これをすべての大名に、譜代だとか、親藩だとか、まあ、徳川一族に近いそういう大名だけではなくて、なんとかつては敵として見なしていた外様大名にまで、全部情報を公開したんです。で、いったいなんでそんなことをしたんだろうか考えてこい、ということだったよね。I君、何でこういうことしたの？

I君：……

石川：アメリカ大統領の国書などのトップシークレットは、幕府は、ずーっと、他の大名には隠しておったんです。で、国の政策を決めるに当たって、他の大名に相談する、ましてや、外様大名に相談するってことは、絶対にあり得ないことだったんです。なんで、それやったの？

I君：前にそうしたことがなかったから……

石川：前にそうしたことがなかったから、どうしていいかわかんなくて、まごまごしちゃって、とにかく誰でもいいから知恵貸してって感じだろうか？
みなさん、ちょっと阿部正弘になったつもりで考えて。これは幕府の慣例を破ること

石川：とです。今までのしきたりを破るってことです。
生徒：これ(情報公開)をやったことのプラスは何だろうか？
石川：考えつかない？

石川：それまでほら、江戸城にいる殿様って何してんだっけ？
生徒：世間話。

石川：世間話。要するに、政治には関与しないっていうのが習わしだったでしょ！？
外様大名はね。それを今度は、一堂に集めて、実はこれこれこういうことがあって…、いきなりやるわけでしょ。そして、「大変だーっ」ていうことを詳しく聞かされれば、

A君：不安になる。

Tさん：幕府もたいしたことない。
石川：幕府もたいしたことない?! 他的大名が「俺が日本を背負って立つ。幕府にはまか

T君：団結力が出てくる。

Kさん：みんなに言いふらす。
石川：みんなに言いふらす?! なんて言いふらす?

Kさん：やばいって。そうすると周りの人が、動いてくれる。

石川：Tさんの意見とちよつと近いかな。

石川：当時、ペリーが来たら、こうしようああしようというのを決めることが出来たのは
生徒：やばいこと。

石川：「やばい」つまり「危機」ですね。これは単なる徳川家の危機ではないですね。老中阿部正弘が各大名に情報提供、「みんな大変なんだ」「知恵を出してくれ」と言う
生徒：だから徳川家の支配が、どうのこうのという問題じゃあなくて、もう、日本全体
生徒：やばいこと。そういう危機意識っていうものを、みんなが持つ、その必要を阿

阿部正弘はたぶん、感じたんじゃないでしょうか!」

石川：で、T君が言ってくれたこの団結力。これは実は江戸時代を通じて徳川が一番恐れをなしたことでした。徳川に対して各藩が団結して反乱などを起こさせないようにいろんな工夫をしたわけです。参勤交代から何からね。とにかく団結させない、経済力を弱くさせない、反乱を起こさせないためにやってきたんだけど、でも、この、ペリーが来航っていうのは、そんな問題を考えてる場合じゃない。だから、中にはおれが日本を背負って立つという人がでてきてほしいだろうし、周りの人、そういう人たちの力をなんとか借りてでもとにかく、この危機的状況は乗り切らなければならぬ。ということで、すべての大名が、日本国にとっての危機なんだ、そういう意識を持ってもらうことだったのではないだろうか。

(中略)

石川：そして、情報公開したことによって、国内では大名によって意見が違ってくる。それが起きてきます。「外国は打ち払え」「鎖国を続けるべきだ」、あるいは「いや、そんなことできない」「もう開国して貿易した方がいい」「貿易によって国を富ませる方がいい」とか。みんな好き勝手に意見を言い合う状況にもなってきた。今度はそれをどうやってまとめていくか。阿部は頭を使います。国内をどうまとめていくかという問題と、アメリカとどう対決するかという問題と、つまり、内憂外患。非常にむずかしい舵取りを彼はしなければいけない。

石川：ペリーが横浜にやってきた時、「林復斎」という幕府の役人を応接係としてペリーと交渉させます。ペリーはその林に対して、こういうふうに脅しをかけてくる。「アメリカにとって、日本という場所は捕鯨船がやってきて、燃料や食料、水を積んだりできる非常にいい港であって、その港に寄ることが出来るかどうかは、捕鯨船員の命に関わる。嵐で難破した場合の漂流員の救助の問題もある。だから、日本の開国は我が国にとって、我が国の人命を守るという意味で、非常に大事なことなんだ。だから、絶対に開国せよ。さもなくば、戦争も辞さず。そもそも、万国の公法を我々は実現しようとしているんだから、その正義の願いを君たちは達成しなければいけない、協力しなければいけない。我々の正義の実現に協力せよ。」

石川：皆さんがそういうふうに言われたら、林復斎の立場で何と答える?

石川：林復斎は阿部正弘に交渉を任されています。「これ言ってダメだったら、その次これ。それがダメだったらさらにその次。」と、いくつかの段階に分けて、譲歩策を阿部正弘は用意させています。ただし、「その交渉の成り行きに関しては、一切おまえに任せよう」「いちいちその内容を俺の所、江戸城に来て報告するな。」「おまえに任せた。」と阿部正弘は言ってるんです。

石川：「だから、港の一つや二つは開港してもいい。」だから、鎖国ということは、もはや現実的にはむずかしい。しかし、一方的な開国も避けたい。そして何よりも、戦争は避けたい。力づくで負けさせられて、さらに不平等な条約を結ばされたら大損だから。港の一カ所二カ所開くぐらいのことはするけども、それをいきなり最初から言うな、ということです。

石川：で、この、ペリーの言葉に対して君たちだったらどう答える？

石川：林復齋の答え方はこういうものです。「あなたの国、アメリカが人命尊重ということを問題にして言うのであれば、我が国はとっくの昔から人命を尊重している。あなた方の国と同じだ。そういう我が国に向かって、あえて武力に訴えるまでもないのでは。「開国をしないと、攻撃するぞ」ということの方がむしろおかしいんじゃないですか。」ペリーに対して、バチッと言います。ペリーはぐっと答えに詰まった、そういう場面もあったようです。
(中略)

石川：最終的には「貿易しません。もともと戦争しているわけじゃないから和平もありえない。まあ、友好的な関係でお互いおつきあいしましょ。」という、わりと平等な関係をつくって、そして、交渉は一応終わり。

石川：この時、日米和親条約を結ぶにあたって攘夷派から相当な反発があったんです。「鎖国を続けよ」「外国のために港を開くなんてとんでもない」とか。こういう考え方の人達をどうやって黙らしたか？ 阿部は、攘夷派の親分、徳川齊昭という人物に対して「交渉はすべて林復齋にまかせてる。まかせた結果、港を開けるということになってしまった。アメリカもそういうふうに、(受け)取っちゃったんだから、仕方がない。」「まあ、こうなったからには、何とか皆さんで、よろしくたのみます。」と云ってる。

生徒：あと5分。(ここから先の5分間は、生徒から質問を受けたり、感想を言ってもらったりする時間に充てている。そのために生徒に時間を見てもらっていて、時間になったら「あと5分です」というコールをしてもらうことにしている。)

W君：先生、白旗の話の時に、正義が、アメリカの正義が実現されるとか言うてたじゃないですか？ アメリカの正義って何ですか。

石川：船が遭難したり、食料求めて港に来たりしたら助けてほしい。お互いに交流して、貿易もしたらいい。これらは大々のためになるから。それは正しいこと。しかし、日本がいつまでも鎖国をしてればそういうことしてもらえないでしょ。それはダメなことでしょということかな。

W君：だったら、空砲鳴らして脅したりしなくてもいいんじゃないの？

石川：ペリーとしては断固たる意志を見せつけ、「絶対開国せよ」ということを迫るためには、必要だったんです。ペリーは「実弾を発射してはならぬ」と言われているんです。アメリカ議会から。「絶対に戦争してはならない」と。だから、威勢だけはいい。

W君：アメリカの正義は今もあるの？

石川：正義というのは今もずーっとあるかっていうこと？

N君：先生、林復齋って、なんか裁かれたりしなかったの？条約を勝手に決めたからとか、こまへ報告しなかったとか、という理由で、攘夷側からなんか裁かれたりするようなことあるはなかったの？

石川：それは、いい質問だね。僕はそこまで確認していないけど、多分、裁かれるようなことは無いと思う。

N君：そうなの？

石川：この人は阿部正弘の絶大な信頼のもとに、どういう交渉をするかということまかされているからね。

N君：それは、攘夷の人たちからはどう見られていたんだろ？

石川：阿部正弘はずいぶん文句を言われたかもね。

N君：でも、阿部正弘は開国をやっていった。

6. 生徒の感想その1 (2000年度)

授業を終えて生徒に感想文を書いてもらった。以下に代表的なものを挙げる。

【1】「阿部正弘という人はすごい切れ者だと思いました。白旗を上げなくてはいけない立場から対等な立場で条約を結んだ点は高く評価できると思います。もし、情報を幕府の中だけで処理して条約を結んでいたら、大名達は黙っていなかったのでは…？」(K. T.)

【2】「日本とアメリカが、戦争にならなくて、よかったと思いました。」(A. N.)

【3】「勇気のある人だとおもう。老中としてのプライドもあったと思う。でも、情報公開しないでいるのは国にとって良くない。また、各大名にも自分の力のなさを認めることになる。それほど追い詰められていたとおもう。／戦争は、なしで。条約という形になったが、アメリカに名誉を傷つけられた。でも、国民の命は助かった。えらい人だとおもう。今回の日本史の範囲はけっこう難しかった。でも考えることが多くておもしろかった。川村瑞賢や白旗、阿部正弘など、知らなかったことが分かってよかった。昔の人もいろいろ生きるために国を守るためにいろいろ工夫をしてきたんだなあと思った。その反対に……上と下の差が激しくて、私はきっと生きていけないとおもう。」(S. M.)

【4】「もし、外国の圧力がかからなかったら、日本はいつまで鎖国をしていたのだろう。もし開国してなかったら今の日本はナイのだから、阿部正弘は開国してよかったとおもう。」

よくわかんないけど。」(T. S.)

【5】「先生の授業は真剣に聞いていれば理解でき、人物や年代を覚えられれば良いのですが、眠い時間帯のせいか、寝てしまってすみません。聞いていれば分かるのでガジバツテ聞いていようと思います。日本が昔どうあって今に至るか。知っておかなければならないこと(くり返してはいけないこと etc) はいっぱいあります。それは自分が知る気がないと覚えられないものです。ヤル気を出してやろう(カナ)と思います。阿部正弘は今までのやり方をひっくり返して、1人が考えるよりはみんな(全藩主)が日本の今のあり方を話した事は、歴史を変えた!!とおもう。」(I. S.)

【6】「アメリカの自分勝手な考え方にあきれた。特に「万国公法」の考え方。「鎖国をしている≡天理に背く⇒罪」と決めつけ、それを正してやるのが自分達だ!なんていって、ただ自分達のやる事を正当化しているだけではないか!?」また、阿部正弘にもあきれた。一見正しいことをやっているように見えるが、ペリーの再来航の時なんて、正に責任転嫁しているだけ!攘夷派に言い訳する時も「林が決めた事だから」と自分の責任を考えてないし。何か今の日本の政治を見ているようで残念だ。でも、林さんはそんな中、本当にがんばったんだと思う。ペリーに一杯食わせるなんて!日米和親条約締結後の林さんはどうなったんだろう? やっぱり地位はあがりたりしたんですか?」(A. T.)

【7】「一度鎖国をしたんだっただらずっと鎖国をしていればよかったのに……。ペリーが来た時に阿部正弘が情報を公開したのはとてもよいことだと私は思う。何にしてもエライ人が上の方だけで情報を持って、そこだけでコトが進んでいる、というのはキライ。」(K. R.)

【8】「開国しないで鎖国をずっと続けていたらかなりおもしろい文化が育ったのになと思った。(みんなやせてたり、ガングロとかもいなくて、胴体が長かったり…) 開国の時期がちょうど良かったんじゃないかと思う。阿部正弘は頭がいいと思った。江戸時代は華やかな感じで明るい時代という感じだったけど、ただ明るいのではなく、その背景に、徹底したリサイクル生活や、人々の知恵がかいま見れてすごいなと感じた。」(S. M.)

【9】「1792年くらいから面白くなるね、」と思ったけど、鎖国という体制をこれだけ長い間持続して、ある程度うまくやってきた日本ってすごいわねえ、」と思った。そんな中で鎖国が崩れていって植民地にされずに、「日本」という国のプライドを持って外国と交渉した阿部正弘さんとかは凄いと思った。つてが感激ですね。良い意味で、正しいイミでのナショナリズムを見た気がするのだ。(S. A.)

【10】「日本がもしずっと鎖国を続けていたらもっとダサイ国になっていたと思うので、ペリーが来てよかったと思いました。」(K. T.)

2000年度以来、過去11年にわたって、ほぼ同じような内容の授業をしてきたが、生徒の感想は実にさまざまである。開国の是非についても、賛否両論である。どの年度においても共通するのは、開国について、自分なりに語る言葉を生徒が持ったという印象である。同じ内容の授業を、敬和学園大学での「社会科と公民科授業研究A」の授業においても、授業研究の一例として行っている。その際に一人の学生が以下のような感想を寄せてくれた。

「私は今日の講義を受けて、教科書には、ペリーの強硬な態度に押されてと記述されているが、実際には林復齋大学頭が、ペリーも思わずたじろぐような言い回しを行ってっており、日本も捨てたもんじゃないう時期があったのだなと思った。／現在は、アメリカが追従外交の姿勢が強く、アメリカの金魚のフンのような国家に成り下がっているけれど、江戸末期の日本人の中には、アメリカ人を討論でギャフンと言わせられる人間がまだ存在しており、時代がこうも変わると、日本人の体質もガラッと変わり、軟弱化して弱まるのかなあと思いました。／私は、日本人は何の抵抗もなく、アメリカの言いなりになるまま、開国を受け入れたとっていたので、阿部正弘や林復齋のような賢者が、アメリカに少しでも噛み付こうと努力をしていた事を知り、同じ日本人として、非常に誇らしく思いました。／また、自分が林復齋の立場だったら、ペリーに対する怒りのあまり、戦争を辞さないみたいな返答を行っていたと思うので、林復齋はペリー(ペリー)の強い言い分にも屈する事なく、相手の論法を用い、相手の前提(言い分)を見事に崩壊させていたので、非常に意志が強く、冷静沈着な人間なのだったろうと思いました。／私は、親と喧嘩をしても、ついカッとなってしまって上記のように振舞えない人間なので、あんなに見事な美しい返答をした林復齋は、本当に賢く、日々努力を惜しまない偉大な人間だったのだらうと思った。／私は、今日の講義を受けるまで、「歴史を知ること」は「異文化交流の裾野を広げること」だと思っていたが、今日の講義を受けて「歴史を知ること」は、「自分の感性(フューリング)を広げること」なのだと思いました。／今日の講義を受けて、自分の感性を広げれば、歴史を深く掘り下げて知ることが出来るようになるのだと思いました。／最後に、今日の授業は、教科書の中のたった一言(一文)に込められた背景を知るとい授業だったけれど、たった一言にもこれだけの内容が詰まっている事を知り、「歴史を知ること」は、「自分の感性(フューリング)を広げること」だけではなく「たった一言に込められた想いや背景を掘り下げる為のアンテナを広げること」にも繋がるのではないかと思いました。／そして、「歴史の真実を知る」という事は、「歴史に目だけではなく、身体全体を傾けること」だと思いました。(2010年度S. K.)

7.3 生徒の感想その2 (2010年度の敬和学園高校の日本史の授業全体について)

このような日本史Bの授業実践を積み重ねて、年度の終わりに日本史の授業全般にわたって生徒に感想文を書いてもらった。その結果、次のような感想文が提出された。代表的なものを挙げる。

【11】「日本史ごちゃごちゃしてて覚えること多くて苦手だし「大好き!!」とは言えないですが、1年間楽しかったです。ノートの中にも「？」のままのことも多く、「歴史ってミステリーなんだなあ」と思いました。「このできごとの裏にはいったい何が!？」とか、「果たしてこれは真実なのか!？」とか、考えたこともありませんでした。ただ教科書に書いてあることが正しくて、それをまなんでいけばいい、と考えていました。先生の授業で、そういった歴史のできごと、人物の裏側まで考えたり知ることができて、楽しかったです。そして、その反面、テストには何が出るか分からない、という怖さもありました(笑) また、時代によって文化も価値観も違って、「日本をよくしよう」とそれぞれが思っても、対立が起きたり…。なかなかたくさんの人が一つにまとまるって難しいんだな、と改めて思いました。」(I. H.)

【12】「やっぱり日本史は楽しい。人間としての器が広くなれる気がする。世界(というか国内ですが)には、すごく立派な人やとんでもない人がいて、時代を動かしたり、日本に新しい考えを生み出したりしていたんだと、この授業を通じて思った。どちらかというと、歴史っていうものは時間が流れれば勝手に作られるものだと思っていたけれど、本当は一人ひとりの人間が生きて、時には命を投げうって、歴史になっていったんだなあと思った。今日、今私がこうして平和に定期テストのことを考えてられるのも、そうした先人たちが、日本を導いてくれたからなんだと思うと、何だか不思議な気がした。一步選択を違えていたら、日本だって植民地になっていたのかも知れないし…。そう考えると、今の現状って、すごいんだなあっと、しみじみ考えていました。」(G. N.)

【13】「日本史のテスト前に、人名や年号を覚えることに集中しすぎて、本来知りたかった「なぜ?」「どうして?」などの問いについて、深くもっと知識を増やせていたら、人生にもっと厚みが出てきて味わい深く物事を考えられるようになれるのかな?と思います。そこが残念でした。日本史は昔の人にとってその時の出来事はぜんぜん歴史でもなかったわけだし、今、私はこの時代に生きているのですが、なにげなく、すぎていってるように見えても、未来、今のことが歴史とされ、授業で習うようになったとしたら、将来、私たちは次の時代の人に何か残せることができるのだろうか?と思います。今、しっかり、自分が生きたいように生きていくことが大事だなと思いました。あと、授業で印象に残ったことは、先生がおっしゃっていた、歴史上の出来事について、自分なりの考えを持って良

いということです。このようなところは、「倫理」の授業とリンクする所があるな、と思います。」(S. M.)

【14】「歴史を学んでいると、いろいろ思うことがあります。こんな時代がまたくるのではないとか、こんな時代だったらどうしていただろうとか、種々様々。部落の問題が関西ではなく新潟でおこっていたら、私はどうしただろう、何を思うだろうと、授業で習ったときふと思いました。／正直に言えば、私は授業で習うまで部落問題の“ぶ”も知りませんでした。まさか、教科書に載っていることが現代まで続いているとは思いませんでしたし、どうして解決してないの?と疑問を持ったこともあります。それに、雨森芳洲がいたら日本はどうなっているのだろうかとか、田沼意次がいたら、この不景気な状況を何とかしてくれるのかなと思うこともあります。日本史は奥が深いです。おもしろいし、自分たちの立っている基盤はここからきているということが知れて楽しいです。」(K. S.)

8. 授業の評価と今後の課題

この開国の授業において、林復齋とペリーとの外交交渉の場面の説明の際に、生徒の興味や関心を引き付けることは、ある程度できているのではないだろうか。生徒にとってこの開国の場面は、単に暗記しなくてはいけない歴史的事実としてではなく感じられたのではないが、生徒の感想の中には、ペリーつまりアメリカの強引さに対する反発も見て取れる。また、外交交渉の場面においてアメリカと対等に渡り合った幕府役人林復齋の交渉術(弁論術)の巧みさに感心している生徒もいる。ただ、そこから先の展開が乏しい。このことにより、阿部正弘や林復齋らが直面した初めての本格的な外交交渉において、彼らが最も大事に考えていたことは何であったのか、それを実現することがどれほど困難なことであったのか、ということについて生徒一人一人がその時代状況の中に入り込んで、それぞれが意見を持ち、その意見を互いにつけ合せて考え合うというところには到底至っていない。

果たして、生徒の心の中に「学ぶという事件」を起こすほどの“吟味”を創り出すことが出来たか、授業の中で生じた各自の問いをどこまで持続して追及させることが出来たか、これらは今後の大きな課題である。

ただ、この開国の授業の内容は生徒にとって「難しいけど面白い」と感じられる内容の一つであることは確かである。

歴史の授業には、内容とやり方次第で、暗記モノではなく、生徒の心の中に「学ぶという事件」を起こし、それまでのものの見方や考え方が変わり、そして、その変化を実に楽しいこととして感じさせることのできる可能性が十分に潜んでいる。

註

- (1) 林竹二「歴史教育のために」『林竹二著作集第V巻 開国をめぐる』1984年、p.270。「子供たちは授業の中で追いつめられて、(厳密には自分で自分を追いつめて) 今までの見方を捨てる。この経験が、子供にしんそこから楽しいのだ。学ぶということは、何かを覚えるとは別のことだ。歴史教育は、ともすれば、客観的な知識の教授作用として理解されがちだが、授業にははげしいドラマがある。(中略) 自分自身との格闘があつて、はじめて自分がのり越えられる。こうして子供は、何かを学ぶのである。歴史の場合も例外ではない。授業が成立しないかぎり、どんなに「科学的に」正確な内容が提示されても、それは、絵にかいた餅にすぎない。子供の側に「学ぶ」という事件がおきない限り、教えるという営みは、終結しない。」同書 pp. 272～273 という指摘は重要である。
- (2) 林竹二は全国の小中学校、定時制高校等で「開国」の授業を行っている。初期の授業の記録は、1971年9月25日、宮城教育大学付属小学校6年3組で行われた授業の記録として『教授学研究年報1』(評論社、1975年)に掲載された。また、東京都千代田区永田町小学校における「開国」の授業は、授業中の生徒の写真とともに 林竹二『授業の中の子供たち』(日本放送出版協会 1976年)の中に記録されている。
- (3) ペリー来航時の日米両国の外交交渉は、日本語→オランダ語→英語、英語→オランダ語→日本語というふうに、3カ国語を使用して行われた。日本語⇄オランダ語は日本側浦賀詰オランダ通詞堀達之助が担当し、オランダ語⇄英語はアメリカ側通訳ポートマンが担当した。この事実は、ペリー艦隊に向かって最初に日本側通詞堀達之助が発した言葉が「I can speak Dutch!」であったという事実とあわせて、生徒にとっては大きな驚きであり、日米両国の交渉場面をリアルに感じられる大事な要素である。
- (4) 2010年度に参考にできる各教科書の記述は以下のとおりである。
- 「アメリカは日本を、対清貿易の中継地や捕鯨船の補給地に利用しようと考えた。このためアメリカは東インド艦隊を再度日本に派遣して開国を求めた。ペリーを司令長官とし、蒸気船を含む4隻の艦隊は、1853(嘉永6)年6月、琉球を経て浦賀に来航した。老中阿部正弘を中心とする幕府は、開国を求めるアメリカ大統領フィルモアの国書を受け取り、翌年の返答を約束して帰国させた。(中略)翌1854(嘉永7)年1月、ペリーはふたたび来航し、きびしく回答を求めたので、幕府は、ついに日米和親条約(神奈川条約)に調印した。続いて幕府は、イギリス・ロシア・オランダとも同様の条約を締結した。ここに2世紀にわたる鎖国は終わった。」(実教出版社『日本史B新訂版』)
- 「幕府は対策のないままペリーの強い態度におされ国書を受け取り、回答を翌年に約してひとまず日本を去らせた。(中略)ペリーは翌1854(安政元)年1月、7隻の艦隊をひきいて再び来航し、条約の締結を強硬にせまった。幕府はその威力に屈して3月に日米和親条約を結び、(中略)幕府はイギリス・ロシア・オランダとも同様の内容の和親条約を結んで、200年以上にわたった鎖国政策から完全に転換した。」(山川出版社『詳説日本史改訂版』)
- 「捕鯨船や中国との貿易船の寄港地として日本に着目していたアメリカは、日本を開国させるために、東インド艦隊司令長官ペリーを派遣した。ペリーは琉球を経て、1853(嘉永6)年6月、軍艦4隻をひきいて浦賀に来航し、大統領の国書を提出して開国を強くせまった。幕府は国書を受領してひとまずペリーを退去させたが、(中略)翌1854(安政元)年、ふたたびペリーが来航すると、幕府は、通商の要求は拒否したが、日米和親条約(神奈川条約)を結び、(中略)200余年にわたった鎖国はおわりをつげた。」(東京書籍『新選日本史B』)(以上、下線部引用者)
- (5) 以下、2000～2010年の間に教材研究で用いた主な資料を以下に記す。
- 林竹二 著作集第V巻 『開国をめぐる』 筑摩書房、1984年
林竹二 著作集第VII巻 『授業の成立』 筑摩書房、1983年

